

[研究ノート]

## 山口県の教育文化

吉村 高男

山陽小野田市立 山口東京理科大学 共通教育センター

## The Educational Cultures in Yamaguchi

Takao YOSHIMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

### 要 約

我が国の教育機関として、江戸時代には、藩校をはじめ、全国各地に多くの郷校（郷学）、寺子屋、私塾等が存在していた。中でも、郷校は全国で 108 校あったが、防長（周防・長門：山口県）で 19 校あり、校数で全国 1 位の数であった。その意味においても、山口県には域内各地で教育文化が根付く土壌があったと言える。山口県で育まれた特徴的な教育文化や道徳文化を語る上で、非常に有効であると思われるものについて、(1) 吉田松陰の行動力、(2) 郷校「徳修館」の存在、(3) 金子みすゞの詩、などを挙げるができる。これらの内容と、今後の教育課程改革に繋がる理念について、本論文で明確にしたい。吉田松陰が主宰した松下村塾では、最近告示された新しい学習指導要領の中で強調されている「主体的・対話的で深い学び」に繋がる教育が日常的に展開されていた。熊毛の地にあった郷校「徳修館」では、最近の学習指導要領の中で強調されている「生きる力」を形成する「知・徳・体」の 3 本柱の立体構造的・順序性の教育理念が貫かれていた。天才的童謡詩人である金子みすゞの詩の中には、仏教的な理念に裏打ちされた東洋的な発想が基盤にあり、今後の教育や科学を語る上で有効である。これらの中には、初等中等教育において順次、実施が始まっている新しい学習指導要領の教育理念と本質的に合致するものがある。山口県の教育文化と今後の教育課程改革の理念を関連づけて考えようとしたことが、本論文を作成した動因である。

**KEY WORDS:** Educational cultures, Chest for living, Shoin Yoshida, Misuzu Kaneko,

Tokushukan: a local school founded in Edo period in Kumage town

キーワード：教育文化、生きる力、吉田松陰、金子みすゞ、徳修館（郷校）

## I. はじめに

2017年(平成29年)～2018年(平成30年)における新しい学習指導要領の改訂<sup>1)</sup>では、知識の理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた授業改善が求められ、2017年3月に幼稚園、小学校、中学校の新しい学習指導要領の改訂版が告示され、2018年3月には高等学校の新しい学習指導要領が改訂・告示された。幼稚園は2018年度から、小学校は2020年度から、中学校は2021年度から順次、全面実施され、高等学校については、2022年度から年次進行で実施される。この新しい学習指導要領では、知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を子供たちに育むため、「何を、何のために、どのように学び、何ができるようになるのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるように、すべての教科や教科外の特別活動等を次の3つの資質・能力の柱(学力の3要素に繋がる)で、目標が再整理された。(1)生きて働く「知識・技能」の習得(何を理解しているか、何ができるか:資質・能力の第1の柱);基礎的な知識・技能(学力の第1の要素)、(2)思考力・判断力・表現力等(理解していること、できることをどう使うか:資質・能力の第2の柱);思考力・判断力・表現力等の能力(学力の第2の要素)、(3)学びに向かう力・人間性等(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか:資質・能力の第3の柱);主体的・多様な・協働的に学習に取り組む態度(学力の第3の要素)である。授業改善を図っていくため、「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」を意識した授業展開が求められている。

最近の教育課程改革の理念に呼応する山口県の教育文化を学校教育のカリキュラムとして授業プログラムに繰り込む手法の一つとして、小中学校における総合的な学習の時間と、自ら課題を見つけて、その問題解決に繋げていく、高等学校における総合的な探究の時間における取り組みが考えられる。新しい学習指導要領では、各教科と教科外の教育活動の内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた中で、総合的な学習・探究の時間における探究課題を通して、それぞれの成長段階における学習プログラムの集大成を図ることが求められている。

しかしながら、教育現場で実際に総合的な学習・探究の時間を担当する先生方の立場で考えると、児童・生徒が取り組むそれぞれの探究課題に寄り添うこと

は、地域の教育力を活用するにしても、日常的に多忙な業務をこなしている先生方にとっては本当に大変な業務となることが容易に想像できる。そこで、教育現場の先生方が潜在的に持っている教科の専門性を活かし、その探究課題に対する多様な切り口と、アプローチの方法を探り、それらを一つの学校だけでなく、広く情報共有する意味で、総合的な学習・探究の時間に関する教材の教育ビッグデータを全国的に蓄積していくことを提言したい。

本稿では、吉田松陰の行動力、郷校「徳修館」の存在、金子みすゞの詩を取り上げることにより、山口県の教育文化が今後の教育課程改革に繋がる本質的な理念・精神を持っていることに迫っていききたい。

## II. 吉田松陰の行動力<sup>2)</sup>

1830年(天保元年)に、吉田松陰は「杉虎之助」として萩で誕生した。父親が杉百合之助、母親が滝である。父親は萩藩の下級武士で収入が少なく、農業中心の生活をしてきた。杉百合之助には吉田大助、玉本文之進といった2人の弟がいた。虎之助は6歳の時に、吉田大助が亡くなり、「吉田大次郎」として養子に入る。吉田家は山賀流兵学師範の家柄で、虎之助は幼少の身でその8代当主となり後を継ぐことになった。吉田松陰の名前はいろいろあるが、この「松陰」や好んで使った「二十一回猛士」は号である。通称は最初が「虎之助」、後に「大次郎」、「松次郎」になり、最期は「寅次郎」であった。9歳にして明倫館の教壇に立ち、11歳にして藩主毛利敬親と多くの人の前で「武教全書 戦法編」の講義を行い、周囲の人達を驚かせた。松陰は行動、実践の人である。21歳の時、萩藩からの許可を得て、九州遊学の旅に出る。松陰が23歳の時、浦賀にペリーの乗った黒船が来航する。最初は長崎に停泊中のロシア船に乗り込もうとするが、ロシア船はすでに出港していた。松陰は、再び日本に来航して、下田に停泊していたペリー艦隊に乗り移り、当時では死罪にあたる密航を企て実行する。日本語ができるウィリアムズが対応し、ペリーは松陰らの志を喜んだが、日本との条約があるため、渡航を手伝うわけにはいかないことを松陰に告げる。このようにして、松陰の企ては失敗に終わり自首を決意する。萩藩主の毛利敬親による温情もあり、実家での「幽囚」の身となる。出獄の3日目から、松陰は幽囚室で家族や近所の人を相手に「孟子」の講義を始める。人が多く集まるようになり、やがて松下村塾(図1、2)で講義を行う。塾生の中には、

松下村塾の四天王と言われ、明治維新の原動力となった高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿、入江九一を始め、初代首相となった伊藤博文や山縣有朋、山田顕義などがいた。学問とは、出世のためではなく、時代を知り、国のために役立つ力を育てること、これが松陰の教育方針であった。松陰は外国からは、進んだ知識をしっかりと吸収することを目指していたが、日本の国を守るためには、外国からの侵略を打ち払うこと、即ち「攘夷」が必要だと考えていた。松陰は幕府への痛烈な批判を強めることにより、再び囚われの身となる。江戸に送られた松陰は、評定所による取り調べの中で、老中暗殺計画を図ったことを告白する。そのことで、判決が死罪となり、処刑は即日行われた（1859年）。享年30歳であった。



図1 教育・道徳文化の原点「松下村塾」



図2 「松下村塾」の講義室

松陰が生涯をかけて示したことについては、次に述べる4点が挙げられる。

まず、「至誠」の心で何事にも取り組んだということである。「至誠にして動かざる者、未だ之あらざるなり」と孟子の言葉にあるように、松陰自身による説明で人の心が動かないのは、松陰自らの真心が足らな

いからだと考えていたようである。

次に、「知行合一」ということである。何事も本質を見据え、行動に移すことによって世の中は動くということを、松陰は全身全霊で持って示した。

さらに「長所・個性を活かす個別指導」を徹底して行ったということである。塾生の興味・関心に寄り添い、自らの発問に自ら答えていけるように適切な資料・書物と助言を与え、お互いが議論できる雰囲気を持て日常的に創り出していたようである。松陰自身の「和魂漢才」に裏付けられた奥深い研究がバックボーンとしてあったからこそと言える。人が持つ長所に気付かせて、熱く燃えることで、自らの短所をカバーし、人間として成長していくという理想的な教育が松下村塾には存在していた。最近、告示された新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の場が松下村塾では日常的に展開されていたと言える。

最後に、「孟子の性善説」に則った不断の努力と行動を松陰は実践していたということである。人間には、本来備えているものとして「憶隠」「羞惡」「辞讓」「是非」の4つの「四端」と呼ばれる心・能力があるが、学んで努力することによって、最終的に目指すべきものとしての仁・義・礼・智の徳を身につけることができると考えていた。まさに、松陰主宰の松下村塾には教育文化・道徳文化の原点があったと言える。

### Ⅲ. 郷校「徳修館」の存在



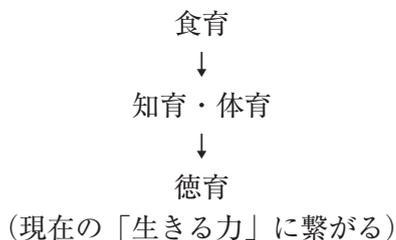
図3 郷校「徳修館」(当時の聖廟が残る)  
～現在の山口県立熊毛北高等学校の前身～

郷校「徳修館」(図3)は、毛利藩における八家の一つである宍戸家の宍戸就年によって、熊毛三丘に、士民教育振興のために1809年に創立された<sup>3)</sup>。初代館長は萩明倫館学頭の山田北海である。「徳修」の由来は、

尚書（書経）巻5の説明（下）篇に「惟（ソ）れ教うるは学の半ば、終始を念（オモ）いて学に典（ツネ）なり、その徳修まりて覚ゆるなし」とある「徳修」に基づいている。即ち、「自分の学問がまだ道の半ばであることに気付く人こそ、真に他を教え導くことができる。教えること、学ぶことは表裏一体である。謙虚な気持ちでたゆまず学問の道をきわめるとき、徳は自然に修まり、ほとばしり出た徳は大いなる力となり、国家社会の進展に貢献する。しかも、自らは無為自然にして何らこだわるところがない。」ということで、教育・学問の世界において、私達が日常的に鍛錬し、習得すべき深い本質がここには語られていると言える。

教育基本法<sup>4)</sup>では、徳育とともに、知育・体育との調和のとれた人間形成が述べられ、食育基本法<sup>5)</sup>では、その基盤となる食に関する指導を通じて、適切な食習慣を身に付けること、即ち食育の重要性が述べられている。

そこで、「徳修館」における教育理念を踏まえ、食育、知育、体育、徳育の日常的な鍛錬の中で、循環する順序性、構造的性について、次のように図式化することを提案したい。



即ち、健全な食習慣のもと、的確な科学観に則った知育、体育の実践は、自ずと人間としての徳が高揚され、修まり、集団・社会の中において適切な関係を築けるようになる。そのことは、様々な課題を抱える、現在の国際社会の中において生き抜き、今後の希望に満ちた、新たなステージを切り拓いていく力にも繋がっていくはずである。徳修館における教則（カリキュラム）については「文化の部」と「武術の部」に分かれていた<sup>3)</sup>。その教則は文武両部をそれぞれ3等に分け、文化の部は下等、中等、上等の3等の中にそれぞれ3科を設けた。即ち、下等（敬道：孝経、大学、中庸の素読；無逸：論語、孟子の素読；観善：5経の素読）、中等（楽郡：読書、詩作、経書復講；琢磨：経書、蒙求の輪読；日就：経書、諸子史の討論）、上等（典学：四書の講釈；小成：諸生の輪講、討論；入学：文学上達の科）である。また、武術の部は、目録、中許、皆

伝の3等に分け、午前8時から午後4時の時間帯で、各自が好むところで、弓道、馬術、剣道、槍術に励んでいたようである。徳修館への入学は7、8歳頃で、卒業には期限がなかったようである。試験は領主が臨席のもとで、春と秋に実施され、優等生には賞品目録が授与されていた。まさに、知育・体育の中で徳育を磨いていたことがわかる。

#### IV. 金子みすゞの詩<sup>6)</sup>



図4 金子みすゞの生家、現在のみすゞ通り

金子みすゞは、1903年（明治36年）現在の長門市仙崎で誕生する（図4）。本名はテルで、「みすゞ」は童謡詩を投稿した際のペンネームである。父親は庄之助、母親はミチである。母親のミチは、後にみすゞの子ふさえを育てる。みすゞには、2つ年上の賢助と2つ年下の正祐がおり、3人兄弟であった。みすゞが3歳の時、父親は清国で反日デモに遭い亡くなる。31歳であった。母親の妹フジが嫁いだ下関の書店の上山文英堂に、1歳の正祐が養子として入る。1920年（大正9年）、みすゞは大津高等女学校を首席で卒業する。その際、答辞を読む。1923年（大正12年）、下関の上山文英堂に移り、童謡詩の投稿を始める。当時の著名な詩人である西条八十にみすゞの才能が認められる。1926年（大正15年）2月に結婚して、11月にふさえが誕生する。夫の放蕩な日常生活が原因で、1930年（昭和5年）2月に離婚する。同年3月10日に服毒自殺をする。享年26歳であった。

金子みすゞの詩<sup>6)</sup>のすばらしさは、誰にも分かる言葉で表現されており、あらゆる分野の人達が、それぞれの立場から、それらの詩を通して深い哲学的情感を覚えるということである<sup>7-9)</sup>。まさに、天才的童謡詩人と言われる所以がそこにあるということができる。

最初に、金子みすゞの詩として、筆者が深い哲学的  
 情感を覚えた「はちと神さま」を挙げる。最近の物理  
 科学は急速な進展が続いており、特に、ミクロな世界  
 を追究する素粒子物理学と、マクロな世界を追究する  
 宇宙物理学との、奥深い繋がりが明らかになってきて  
 おり、宇宙の始まりに限りなく近づいていることが興  
 味深い。その本質を平易な言葉で、誰にも分かるよう  
 に表現している詩が「はちと神さま」である。

「はちと神さま」

はちはお花のなかに、  
 お花はお庭のなかに、  
 お庭は土べいのなかに、  
 土べいは町のなかに、  
 町は日本のなかに、  
 日本は世界のなかに、  
 世界は神さまのなかに。

そうして、そうして、神さまは、  
 小っちゃなはちのなかに。

一般に、教育現場で行っている自然・社会・人文分  
 野における教科の内容は、宇宙進化、化学進化、生命  
 進化、さらに、人類の歴史を通して築き上げられてき  
 た、様々な階層の姿と繋がりの認識を深めている作業  
 だと言っても過言ではない。その様々な階層が、最近  
 の物理学の追究により、日常の世界とマクロな宇宙  
 の世界及びミクロな素粒子の世界が「ウロボロスの蛇」  
 (図5)のように一つに繋がること分かった。まさに、  
 現在、私達人類はすべてが繋がる不思議を体験してい  
 ると言える。

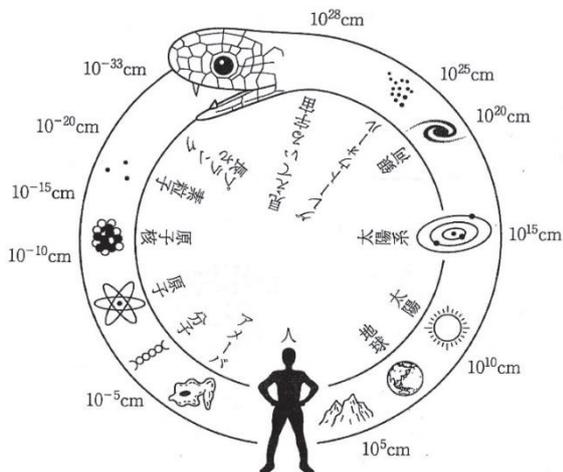


図5 「ウロボロスの蛇」の図  
 ～ マクロとミクロが繋がる不思議 ～

さらに、「ウロボロスの蛇」の図を通して、物質の  
 階層性の中で織りなす法則性のカテゴリーを直観する  
 ことができ、学問体系の諸分野の位置づけについても、  
 この図の中で明確に認識することができる (図6)。

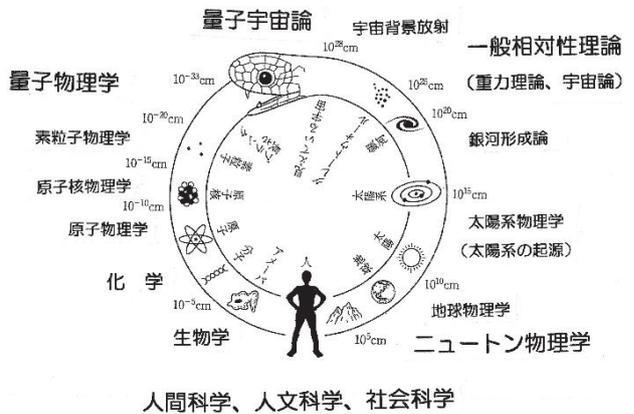


図6 「ウロボロスの蛇」と学問の諸分野

さらに、私達が学校教育で習ってきた原子論、即ち、  
 アトミズムに代表される「メンデレーフの周期表」に存  
 在する元素が、宇宙に存在する物質のすべてではないこ  
 とが、最近の宇宙観測によって明確になってきた<sup>(10)・(11)</sup>。  
 私達が知っている元素は宇宙全体のエネルギーの5%  
 に過ぎず、銀河の安定性等に必要な未知の重力源であ  
 る暗黒物質(約27%)、さらに、数十億年前から宇宙  
 加速をもたらしている未解明のエネルギーである、暗  
 黒エネルギー(約68%)の存在がある(図7)。

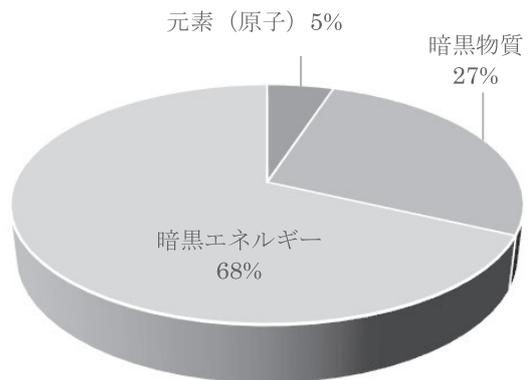


図7 宇宙エネルギーの構成図

この件については、金子みすゞの詩「星とたんぽぽ」  
 が、このあたりの事情を想起させる平易な言葉で巧み  
 に表現している。

## 「星とたんぼぼ」

青いお空のそこふかく、  
海の小石のそのように、  
夜がくるまでしずんでる、  
昼のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、  
見えぬものでもあるんだよ。

ちってすがれたたんぼぼの、  
かわらのすきにだまって、  
春のくるまでかくれてる、  
つよいその根はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、  
見えぬものでもあるんだよ。

ところで、一人ひとりの個性と長所を大切に、様々なことが共生できる、多様性を認めた教育の原点が吉田松陰の主宰する松下村塾にはあったと言えるが、金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」はそのことを言い当てており、教育の本質に迫る表現がそこにある。

## 「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても、  
お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のやうに、  
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすつても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のやうに、  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

## V. おわりに

本稿で述べてきた内容は、今後の教育課程改革を推進する上での重要な視点と教育的潜在力を示していると言える。しかしながら、その教育課程改革を地球環境・エネルギー・食糧問題といった地球的規模の課題

解決に繋げると同時に、最近の科学の進展を踏まえた宇宙観・地球観・自然観を持ち、人類生存のためのより本質的な教育課程改革にも、私達は勇気を持って取り組む必要がある時代に入っていると言える<sup>12)</sup>。

これからは、ますます、私達の地球環境系が宇宙空間と繋がる開放系で、熱収支平衡系であること、さらに、地球環境は有限系であることを、私達はあらゆる場面で深く認識していく必要がある。全地球人による豊かな科学・技術力の共有を進め、持続可能な地球環境・エネルギー・食糧政策の実現を促す有為な人間育成の教育を創造していくことが、この太陽系第3惑星に居住する私達に課せられた急務である。

吉田松陰が大和魂を大切に、幕末において「和魂漢才」から「和魂洋才」への転換について、死を賭して示した知行合一の精神には、時代の改革期を生き抜く人間としての生き様を感じる。「徳修」に秘められた教育の本質は「和魂漢才」の中で創られたものであるが、古今東西を通じて、人類普遍の教育の中に共通するものを感じる。金子みすゞの詩の中に潜む宇宙観・人生観には、西洋の合理的・分析主義を乗り越えた東洋的発想があり、新たな科学・技術の精神・理念を直観させるものがある。まさに、人類史的な中における「和魂和才」の到来を感じる。これらに象徴されるように、山口県で生まれ、語り継がれている教育・道徳文化の中に、今後の教育課程改革を実行する上で、大きなヒントとなるものがあるといえることができる。

## 【参考文献】

- 1) 幼稚園教育要領，文部科学省告示，2017  
小学校学習指導要領，文部科学省告示，2017  
中学校学習指導要領，文部科学省告示，2017  
高等学校学習指導要領，文部科学省告示，2018  
特別支援学校学習指導要領，文部科学省告示，  
小・中学部 2017, 高等部 2019
- 2) 松下村塾開塾 150 年記念誌出版委員会；吉田松陰  
と塾生たち，2007  
古川薫；松下村塾，講談社学術文庫，2014  
古川薫；吉田松陰 留魂録，講談社学術文庫，2002  
福川裕司；吉田松陰－松下村塾の指導者，講談社  
学術文庫，1996
- 3) 徳修館由来記；山口県立熊毛北高等学校，1975
- 4) 教育基本法；教育小六法（2020 年度版），  
学陽書房，2020
- 5) 食育基本法；衆議院・参議院で制定・施行 2005，  
最終改正 2015

- 6) 金子みすゞ; 金子みすゞ童謡全集, JULA 出版社, 1984
- 7) 吉村高男; 金子みすゞの詩と最近の宇宙観, 日本物理学会中国・四国支部学術講演会講演予稿集, 126, 2012
- 8) 吉村高男; 金子みすゞの詩と最近の宇宙観, 山口福祉文化大学研究紀要 7, 51-58, 2013
- 9) 吉村高男; 教育改革に活かす金子みすゞと吉田松陰の心, 教育弘済会研究助成 教育実践論文, 2005
- 10) D. N. Spergel et al.; First Year WMAP Observations and Determination of Cosmological Parameters, arXiv: astro-ph / 0302209v3, 17 Jun. 2003
- 11) Planck Collaboration : P. A. R. Abe *et al.* ; Planck 2013 Results X VI Cosmological Parameters , Subjects : Cosmology and Nongalactic Astrophysics, arXiv: astro-ph / 1303. 5976v3, 20 Mar. 2014
- Planck Collaboration : N. Aghanim *et al.* ; Planck 2015 Results X I CMB Power Spectra, Likelihoods, and Robustness of Parameters : Astronomy and Astrophysics, arXiv: astro-ph / 1507. 02704v3, 30 Jun. 2016
- 12) 吉村高男編集; 小中高大連携によるカリキュラム研究, 山口県ひとつづくり財団 研究報告書, 2007